

自治会親睦行事紹介

丸山自治会納涼大会

丸山自治会は、会員相互の親睦を深める機会と場所を提供し、会費の還元も含めて実施しているのがこの納涼大会です。

町民センター中庭（コミュニティ広場）で模擬店や子供会によるゲームコーナー（売上金1景品代、収益金 少子化に伴い減少する子供会の活動費の一部として）を開催しています。今回で2回目になります。実行委員の苦労があつてこそ出来ることです。またカレー事件のような事故のないよう警備もしています。ここで今年度の出店品目をご紹介します。

フライドポテト・チキンバー
・いか天揚げ・焼き鳥・焼そば
・じゃがバター・味噌おでん・綿菓子・ポップコーン・冷たい飲み物・生ビール・生パイン。どれも良い品物を安く仕入れることにより、安く販売が出来、また機材を無料で提供してくださる方がいることにより、費用を最小限にできています。（北海道からの直接仕入れ等）

今後子供たちの自主性を養う場としても見守っていききたい。（丸山自治会 飯塚 潔）

城北ひまわり納涼大会

地域住民による親睦を深めてもらおうと、今年も「城北ひまわり納涼大会」を、ひまわり子供会と自治会との協賛により、8月24日（土）午後5時から真鶴生コン広場で開催し、近隣住民や家族連れ約三〇〇人で賑わいました。

バザーコーナー、ゲームコーナー（子供会運営）及び模擬店による飲食コーナーあり、多くの出店で盛り上がりました。特に参加者の人気を集めていたのが「ボーリングコーナー」でした。午後5時から子供太鼓の演奏、7時から婦人会による盆踊り。子供太鼓の熱演には特に会場から拍手も起り、拍手も贈られました。盆踊りは真鶴音頭から東京音頭と曲に合わせ、一般観客も輪の中に入り、約30人で踊りました。天候にも恵まれ、お年寄りから子供まで大勢の皆様が予想以上に参加いただき、真夏の夜のひとときをワイワイ楽しく踊り、盛大に開催することができました。

（城北自治会 関浦勝美）



ふれあい写真展



家庭内の対話、近所とのふれあいと連帯、町民文化祭での展示。ささやかな文化の輪を広げ、ことを願う、三回目の写真展「シャッターを2回押して町民文化祭に参加しよう」を行います。その概要は、

- ①隣組の回覧板にカメラをつけて回し、2枚写真を撮って次の家に回す。
 - ②病気や独居の家は、届けた人が代わりに押しあげてあげる。
 - ③人物・ペット・風景など、何を撮っても結構。
 - ④出来上がった写真は、地区単位で役員が紙に貼り、文化祭で展示し、終了後に参加賞として配付する。
- 近所の助け合いと家族の対話を願うの計画です。ちなみに費用は文化活動費として予算に計上し、昨年度の実績は三万五千円でした。

（東自治会 吉村貞雄）



終戦前日の回想

1945 8月14日

前夜の空襲、明けて8月14日午前8時決まった時刻のラジオからの音声。「東部軍情報、東部軍情報」「関東地区、関東地区。警戒警報発令。敵機数十機が相模湾上空よりわが本土に向いつつあり」やがて空襲警報発令、半鐘がけたたましく鳴る。

やってきたな。米軍の艦載機グラマンは今日どこを攻撃するのか。わが本土の上空を悠々と相模湾より侵入、当地の上空を通過して東京方面へ向う。私たちが子供は夏休み（当時国民学校）、この頃はもう空襲になれている。敵機を上空に見ても慌てない。防空壕にも入ろうともしない。約1時間後攻撃を終わつた敵機は、残りの爆弾を落として帰る。今日は近所のおじさんが出征する日、9時半、家の前には隣組の人たちが大勢集まってきた。出征することはおめでたいことだが、戦況は不利。無事に帰ってくることは考えられない。楽しそうに見えてもつらいことだ。ことに家族にとっては最後の別れとなる。

戦争当初の勝ちいくさの頃は、出征兵士の武運長久を祈り、町内あげての楽隊先頭で駅まで送ったものだが、既に負けいくさ。送る人は女性、子供と男の年寄り。組長さんの出発前の激励の言葉に続いて、全員が合図に合わせて万歳三唱。おじさんは日の丸の旗を持ち、我が家を後にする。

露営の歌
勝ってくるぞと勇ましく
誓って故郷を出たからは
手柄たてずに死なうようか
進軍ラッパ聞かたびに
暇（まぶた）に浮かぶ旗の波
何回も繰り返し歌いながら駅まで行く
やがて列車が来る。最後の別れだ。みんなの丸の旗を振り、声を限りに万歳を叫び、列車が見えなくなるまで見送る。午後3時頃空襲がある。悠々と飛ぶ敵機にこれを迎え撃つ日本機は1機もない。私たちは山へ行き、防空壕の穴掘だ。山の中に住宅の一部を取り壊して移動組み立て中の小屋がある。小屋と防空壕は当時米軍が相模湾へ上陸するのと避難場所としたものだ。また、海岸近くの山々には日本陸軍が本土決戦に備えて、

陣地の構築をしていた。そのために大勢の兵隊さんは、学校お寺公会堂等に宿泊して待機していた。兵隊さんたちは、食糧難で食べ物が乏しく、私の家にうどんなどを食べに来た。（兵隊さんの食物はコウリヤン米、ジャガイモ、サツマイモ）私の家では、両親が作ってくれたうどんが毎日のように食べることができた。兵隊さんは休みを利用して、感謝の気持ちで穴掘りの手伝いをしてくれた。穴は高さ1・5m、幅1m、奥行5m、中は畳が2畳位の広さで、15人位の人が入ることができた。昼間の空襲が終わり、夕方6時半夕食、真夏の夜は7時半頃まで明るい。暗くなると電気がつけたいが、つけることはできない。敵機に見つかってしまふのでつけることを禁止されていた。（灯火管制）夕食はうどん、ジャガイモ。主食は配給制で、米は一週間に1日分。後はイモ類、豆類。（終戦後はサケの缶づめ）

夜8時、決まった時刻に半鐘が鳴る。空襲警報だ。昼は艦載機、夜は恐ろしく大きいボーイングB29大型爆撃機、1日中休みはない。日本の飛行機とはお盆の上のマッチ箱位の差があると言われていた。今夜はどかが爆撃されるのか。そして死者が出る。負傷者が出る。焼き出された人たちはどうなるのか。

都会の子供たち（小学4年生以上）は親元を離れて疎開している。私の従弟たちも伊勢原の三福寺というお寺に疎開していた。疎開している間、川崎空襲で従弟の母親と弟二人は亡くなつてしまった。父親は戦地に行っている。この先彼らのことはどうなるのか。

それでも国民は日本の勝利を信じていた。歌い文句は、「ほしがりません勝つまでは」と、またもしも日本が負けたなら、「電信柱に花が咲く」「焼いた魚が泳ぎだす」「潜水艦が空を飛ぶ」などと言われていた。私たちは山に避難し、敵機が去るのを待つ。三時間後、空襲警報解除の知らせを聞く。

B29の三〇〇機を越す大編隊による東京空襲からは毎日昼夜の空襲があったが、一夜明けた8月15日、山小屋での静かな朝を向える。10時になつても空襲がない。昨夜が大東亜戦争での最後の空襲だったのだ。このことをあれから57年目の今日思い出す。

歴史に残る一頁かな
平和を願う いつまでも
（山ゆり自治会 寺山 武）